
VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

【Nコード】

N2088BA

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

和風のVRMMO、ヤマト・オンラインをプレイしていた俺はクラスメイトである美少女、要を助ける。

普通なら、素晴らしい恋のはじまりと考えられるが、要はマフィアの娘だった。

小学生の妹とか廃人プレイヤーの従姉妹、ツンデレもどきのデレデレなんかをうまくかわしつつゲーム攻略。 女の子ではなく、ゲームです。

「結婚はまだですか……」

「だが断る」

001、助けたのはマフィアの娘。

現在、世界中でVRMMOが流行していた。

従来のVRMMOは特定の空間にダイブしてプレイするものだから、大抵はかなりの金がかかり、貧乏人にはなかなか手が出せない。必要な物全てを揃えるのに大体サラリーマンの給料二ヶ月分らしい。

当然子供にはそんな大金用意することなどできず、親に買ってもらおうにも家計は火の車なんだからどうにもならない。

とりあえず俺は問題なかった。べつに普通のゲームで十分に満足できていた。

けど、妹は違った。妹は、空間にダイブして自ら戦うことができるというシステムに憧れを抱いていた。

どうしても欲しいと駄々をこねる妹のために安いVRMMOを探し回ることになった。

それで見つけたのが、ヤマト・オンライン。どういうわけか、子供の小遣いで買えてしまった。

他のVRMMOとは違って、和風らしい。中世ヨーロッパ風を妹が期待していたなら申し訳ないが。

なぜ、このヤマト・オンラインだけは安かったのか――。

目の前には新緑の草原が広がっていた。
太陽の明るい光を浴びて輝く草原は、綺麗で良い風景だった。
少なくとも、目の前に魔物がいなければ。

正面に視線を移すと、真っ白な首が何本もあり、うねうねと何とも言えない身体を持つ《白蛇》が立ち塞がっていた。

聞いていていい気はしない奇声を発して口からは紫色の霧のようなものを吐き出している。

俺は、上を見る。

そこに表示されていたのは、HPバーとMPバーである。

HPもMPも最大まである。

戦う上で問題はないだろう。

そして、自分の隣に視線を移す。

そこには、一人の少女が座り込んでいた。

サラサラした系のように細い黒髪を肩まで伸ばし、一つだけ小さな白いリボンをつけている。可愛い顔立ちで巫女服に身を包んでいた。

俺は《白蛇》に視線を移す。

武器は何も持っていない。

その時、《白蛇》が動いた。

いくつもある首のうちの一本が素早くこちらに伸びてくる。

その首は鋭い牙を剥き出しにしている、噛まれたりしたら一溜りもないだろう。

少女は目を見開いてオロオロしはじめる。

魔物が攻撃してきているのに対して、俺が何の武器も持っていないのをまずいと思っているのだろう。

けど、武器はなくても戦える。

素早く《白蛇》の首を避け、その首を素手で掴んだ。
暴れ回るので、そう長く止めておくことはできない。

首を掴んだまま、もう片方の手を振り下ろす。
その瞬間にスキルが発動する。

正面に緑色の文字列が表示される。

《風斬り》

緑の輝く光がその首を貫通し、切り落とす。
ぼとりと首が落ちる。

なかからは、緑色の血が流れ出ていて正直気持ち悪い。
こういうことを考えると、素手ではなく遠距離から攻撃できる武器の方がいいと思うのだが。

切り落した首を一瞥し、本体をじつと見据えた。

本体は焦ったように後ずさる。

そして、慌てて姿を消してしまう。

当然のことだが、逃げられた場合、経験値は入らない。

……あんなにすぐ逃げ出すとは、ドラ・エのメ・ルスライムじゃあるまいし……。

とりあえず俺は少女に視線を移した。

俺は、今ままでここではこの少女に会ったことはなかったが、現実世界で知ってはいた。

最も話したことはなかったのだが。

確か、名前は桜坂^{さくらざか} 要^{かなめ}。学校のクラスメイトで優しい人柄と端正な顔立ちのせいで男子には人気だった。

しかし、人気がありながらも彼女に言い寄る男は一人もいなかった。

確か、父親がマフィアだとか噂を聞いていたけど。

じつと見てみると、彼女ははつとしたように慌てて立ち上がった。
頭を下げて、

「ありがとうございます、助かりました！」

そう礼を告げる。

細い髪が揺れる。

礼儀正しくて、とてもマフィアの娘だとは思えない。

それにしても……どうしてこの子がマフィアの娘なんだろう。

マフィアの娘でなければ、ここは絶好のチャンスだったというのに。

こういう緊張した場で、男が女を助ける。恋愛ものの王道のような状況。

うまくいけば、ここから素晴らしい愛の世界が展開できたかもしれないが、いくら容姿が良くてもマフィアの娘ならべつだ。

仮に好意を寄せられれば、この子の親に殺されるなどという話もあるかもしれない。

まさか、女に好かれたのが理由で殺されるのはごめんだ。

要は、じつと俺の顔を上目遣いで覗き込みながら尋ねてくる。

「あの……、神原 飛鳥君ですよね……？」

「……さ、さあな、人違いじゃないか？」

両手で顔を隠しながら、そう言ってみる。

これで明日にでも、現実世界で彼女の取り巻きの前で話しかけられたりしたら暗殺でもされかねない。

「あ、あの、何かお礼を……」

彼女が顔を上げて言おうとするが、それを制止した。

そして、相手を不快にしないように、にっこりと笑顔を浮かべた。

「礼なんかいらない。困ってる人を助けるのは当然のことだからな」

むしろ、この態度が余計に相手の好感度を上げたことには後で気づくことになった。

要と別れると俺は、妹を探して回った。

町の入口まで行くと、門の前で妹の春麗しゅんれいが立っていた。

黒い髪を二つに結ってくりくりした目で袴姿でピョンピョン飛び跳ねて手を振って来る。

「お兄ちゃん、久しぶりーっ」

「そろそろログアウトするぞ。小学生がはしゃぎすぎるところなくなとがないからな」

「むー、ひどいよ」

今日はこれで終了だった。

事件は、学校に登校してから起こる。

いつもと同じように木製の少し古びた校舎に入り、教室までいくと自分の机にカバンを置いた。

もうクラスメイトのほとんどが来ていて、話し込んでいた。

「あ、あの……」

背後から声をかけられ、振り向いた。

目に入ったのは、サラサラした流れるような黒髪。

昨日の美少女が、自分の背後に立っていた。

彼女が顔を赤らめて言葉を放つ。

「飛鳥くん、私と結婚してください！」

今日で人生が終わるな、これは。

002、兄は大抵シスコンになるものである。

「私と結婚してください」

突然言い放たれた要の言葉にクラス中が静まり返った。

どのクラスメイトも固まってじっとこちらの様子を伺っていた。

俺の目の前にいるのは、紛れもなくこの学校で一、二を争う美少女でマフィアの父親を持つ要だ。

要はじつと俺を見つけていた。

どつと冷や汗が噴出してくるような気がする。

この教室は、要の親の部下達が盗聴器でも仕掛けているなどということはないだろうか？

いや、親バカだったりしたらやりかねない。

どこで盗聴されているかも分からないこの状況で、危険過ぎる。

仮に盗聴されていなくても、ここにいるクラスメイトが噂をバラまいたりしたらどうする？

うっかり要の親の耳にでも入れば、間違いなく消されるだろう。とにかくこの状況を何とかしなければ。

「あ、ああ、昨日君が言ってた結婚ごっこか。しかし、ここは学校だから」

とりあえず適当なことを並べて要の腕を引いて慌てて教室を出た。しかし、結婚ごっこって何だ、ごっこって。

よく考えれば高校生にもなって何とかごっこかするわけがない。この歳になっても、中身はガキのままの痛い奴だと思われてしまうこともある。

でも、要に好意を寄せられていると周りに思われるよりは痛い奴と思われた方がマシだ。

廊下で話すといつ誰が通るのか分からないで、しばらく歩き続ける。

木製の廊下は古くなっていて、歩くためにぎしつと床が軋む。大丈夫なのか、この学校は。

近いうちに崩壊でもするんじゃないのか。

理科室に入るとドアを閉め、誰もいないことを確認すると要に問いただした。

「どうということなんだ？」

要はそう聞かれとじつと俺を見つめたと思うと視線を逸らして顔を真っ赤にして、両手でごしごしと目をこすったり後ろを向いてみたりと動き回っていたが、やがて椅子に腰掛けた。

要はじつとこちらを見上げて何も言わずに膝に両手を置いて座っているだけなので、俺から何か切り出すことにした。

一度大きく息を吸ってから、言葉を発する。

「俺は、結婚ごつことかするような歳じゃ——」

「ごっこんなにかじゃありません！」

珍しく要は大声を張り上げた。

恐る恐る様子を伺ってみると、ぶくつと頬を膨らませていた。

どうやら怒ってるらしいけど、正直可愛いとしか言いようがない。

「これは真剣な話なんですっ」

「じゃあ、君は本気で俺と結婚したいと思ってるのか？」

「そうです」

「言っておくが、俺は婿養子になんか行かん。神社を継いでこっそり暮らしていくつもりなんだ」

「ちゃ、ちゃんと私がお嫁さんに行きます」

真剣な表情でそう告げられ、どうしていいのかわからなくなってしまった。

確かに将来は結婚も必要にはなるだろう。

一応父の跡を継いで神社をやっていかなければならないし、子供も必要になるだろうから。

しかし、相手は選ばなければならない。

いくら美少女で性格も良いとしても、相手と結婚して自分が早死にするようなハメになっては困る。

できれば俺も長生きはしたいわけで。

それに、要が美少女で人気があると言っても、俺が要を好きであるとは断言できない。

一応、ある種の憧れは抱いているが、それが恋だとは言い難い。

俺は腕を組み、要に言い聞かせる。

「結婚というのは、両想いでなければできない」
「は、はい」

要は何かを期待するような眼差しでそわそわしながらこちらを見ってくる。

頼むからそんな目で見ないでくれ。

俺は、にっこりと笑ってみせた。

「けど、俺は君に恋はしていないんだ。だから、この話は不成立と
いうことになる」

空は赤みを帯びていて、周囲に新緑の葉をつけた木々が生い茂る
土地の中央にぽつんと存在する神社に帰って来た。

神社にはお賽銭箱と大きな鈴があり、お祈りができるようになっ
ている。

俺は裏口に周り、小さなドアを開けてなかへと入った。

木製の床と天井はきれいに掃除されていて、ホコリも見当たらな
い。

自分の部屋まで行き、ちゃぶ台の前の座布団に座るとがっくりと
うなだれた。

ヤマト・オンラインを買って初めて損をした。

ヤマト・オンラインが安い理由は、アバターを作るための機能が
存在せず、現実の世界の姿のままでプレイしなければならない。

そのため、何か問題が生じても顔が明かされてしまっているから
逃げられないなどということもある。

俺は全くそのことを気にしていなかった。

ゲーム内で問題が起きれば、現実世界にも及んでしまうことがある——だから、発売当初は批判を受け、大幅な値下げに至ったと。とりあえず初めて後悔した。

頭を抱えていると、パタパタと足音が聞こえて来て春麗が部屋に飛び込んできた。

ランドセルを放り投げると笑顔で。

「お兄ちゃん、ゲーム！」

「……………ダメだ」

春麗はぶくーつと頬を膨らませた。

「何でー！？ ダメだよ、友達と約束してるのに！ もう、お兄ちゃんはやらないんだったら一人でやるもん！」

「それはダメだ。………… もう一緒にやるから安心しろ」

俺は春麗に一人でやらせるのはよくないと思っている。

春麗はまだ小学生だし、誰かに騙されたりするかもしれない。

顔も割れてしまうわけだから、ゲームで絡まれたロリコンに現実でもストーカーにあったりしたらどうする？

過保護だと父にも言われるが、断じて普通のことだ。

………… 要に出くわさなければいいが。

要はヤマト・オンラインにログインし、武器屋で装備を整えていた。

石造りの狭い店内にぎっしり並べられた槍や扇子、手裏剣、刀などをじっと物色していた。

これは、何と云えばいいのだろう。

春麗が武器を買うからとここまで来たが、いきなり要がいるとは幸い、まだ要はこちらに気づいてないようなので俺は身をかがめて春麗の後ろにいた。

これで見えないはずだが。

ふと、店のなかに人が入って来た。

少し長めを黒髪を後ろで一つに縛り、端正な顔立ちで袴姿の青年である。

彼は怒りを剥き出しにした表情で要に声をかけた。

「どういうことなんだ、要！　いきなり男に求婚するなんて！」
「……………」

まさか、既にあの話は広まっているのか？

いや、マフィアの娘で美少女な要が突然男に求婚したら話題にならないはずはないかもしれない。

「お兄様、どこで聞いたんですか？」

兄だと？　既に要の家族にまで？

要の兄は腕を組んで

「お前の学校の子が言ってた。ねえねえ、あの桜坂さんが神原君に

求婚したんだって、本当？ すっごいね、神原君は要さんのお父さんに撃たれたりしないのかな？心配だよね！　だとか噂になっていたんだ！」

何も喋り方まで再現する必要はないんじゃないか？

せっかく端正な顔立ちをしているというのに、台無しなのでは？

「どこの馬の骨とも分からない奴と結婚するなんてお兄ちゃんは許さないぞ」

自分でお兄ちゃんとか言った。

もはやイケメンが台無し以外の何者でもない。

どうやらあの兄はシスコンらしい。もし、見つかったりしたら面倒なことになるのは間違いない。

「お兄様、私は恋をしてるんですっ」

「いいや、恋じゃない！　一度助けられただけだろう。要は、女が男に助けられて恋に落ちるというシチュエーションの漫画が好きだから勘違いをしているだけなんだ！」

「いいえ、違います！」

要はぶくぶくと頬を膨らませる。

何なんだこの兄妹は。

気づけば人が集まって来ているし、人前で言い合いして恥ずかしくないのか。

美男美女の兄妹の言い合いは流石に人の興味を惹いていた。

その様子を見ていた春麗が何かに気づいたようで、要を指差して言った。

「あー！　あの人、お兄ちゃんに求婚したお姉ちゃんだ！」

「春麗!？」

いきなり何を言い出すこの小学生は!

春麗は首を傾げて俺を不思議そうに見る。

「でも、何で振っちゃったの? 神社の息子だから処女は捨てちゃダメなの?」

「春麗、俺の場合は処女じゃなく童貞だ」

要の兄がゆつくりとこちらを見る。

頬を引きつらせて、額に青筋が見える。

ああ、これは――。

「要に求婚された上に、処女が大事だから要を振った……だと?」

求婚を受けても受けなくても悪い方向にしかいかないだろう、これ。

どういうことだ。

あと、処女じゃなくて童貞だ。バカなのか。

この状況を、どう切り抜けると。

003、妹にだけ優しい二重人格はうざい以外のなにものでもない。

「貴様が神原君か！」

要の兄は鬼のような形相でこちらに近づいて来る。

ものすごい迫力で、流石はマフィアの息子だと納得してしまった。しかし、これはまずい。

あの兄はどう見ても憤慨している。

どう弁解してもダメな気がする。

要さんが俺のことを一方的に好きで、俺は好きじゃないんですよなどと言ってもいっそう怒らせるだけだろう。

どうするべきか迷っていると、要の兄は胸ぐらを掴んできた。

「俺の妹をたぶらかすとはどういう見だ！」

もはや俺は悪役にされている気がするならない。

困っていた女の子を助けただけでこうなる理由が全く理解できない。

いくら何でも理不尽すぎないか。

この場で殺られるのか？

いや、ゲーム内に本物の銃は持ち込めないだろうから、それはないだろうが、現実世界ではいつ殺されてしまうか分からない。

何としても、ここで何とか宥めておかなければ。

「わー、お兄ちゃん頑張れーっ！」

春麗は可愛らしい笑顔を浮かべてパチパチと拍手を送ってくれた。いや、拍手はいらないんだ。

俺は遊んでいるわけではないんだ！

兄のピンチなんだぞ、妹！

心配ぐらいしてくれてもいいんじゃないのか？

「やめてください、お兄様！」

助けを待っていると言が慌てて間に割って入ってくれた。

要は兄を押し戻す。

要の兄は、きつと要を睨みつけて声を荒げる。

「何を言ってるんだ！ アイツは要を弄んだというのに——」

何だこの兄は。

次々とでつち上げるのはやめてくれ。

俺の記憶には、要を弄んだものなど一つも見当たらない。

素直に対応しただけというのに、なぜそうなる？

むしろ弄ばれたのは俺の方なのでは？

それを、勝手に俺を悪者に仕立てあげようとは、殴りたくなってきた。

しかし、ここで殴ったりすると後で始末されかねないから堪える他ない。

要は、ほっぺを膨らませて兄を睨め返していた。

「私、飛鳥君に暴力振るおうとしたり悪く言う人は嫌いなんですっ！」「嫌い……？」

相当なダメージを受けたらしく、よろよろと後ずさり、膝をついた。

放心したような様子で呟く。

「要が俺を嫌いになる……？」

ざまあみると鼻で笑ってやりたくなつたが堪える。

「そ、そんな……。要……お兄ちゃん是要に嫌われたら……」

周囲に人がいるというのに、シスコン丸出しとはある意味すごい気がする。

お笑い芸人でもやれるんじゃないのか？

あの美形と中身のギャップで何気に人気が出そうだ。

要は花のような愛らしい笑顔を浮かべて兄の頭を撫でる。

「嫌いになんかなりませんよ——飛鳥君にひどいことさえしなければ」

最後に俺にとってありがたい言葉を添えてくれた。

要の兄は、ぱっと顔を上げ言い放つ。

「分かった！ 飛鳥君にひどいことはしない」

何で君づけなんだ？

「……非常に不本意だが」

小声でそんなことを付け足すあの兄を本気で殴りたい。

奴はジロリと俺を睨みつけた後、要に向き直ると笑顔を浮かべた。その態度の変わりようが余計に腹立つ。

要が兄の腕を引いて来て、少し動揺しながら話しかけてくる。

「ごめんなさい、飛鳥君。この人は、私の兄で」

要がくいつと兄の裾を引っ張るとそれが合図だったのか、兄はこほんと咳払いして真剣な表情で。

「桜坂 冬馬だ。先程はすまなかった。悪気は全くなかったんだが」「ほう……？」

先程とは全く違って、クールな優等生か何かみたいな雰囲気であいづろをしてくる。

悪気はなかった、だと？

あれだけ言っておいて、悪気がないとは有り得ない。

「俺は、何もしていないのにでっち上げられて胸ぐらを掴まれて悪者に仕立て上げられそうになったことも全く気にしてないから安心しろ」

につこりと笑顔で手を差し出した。

冬馬もにつこりと爽やかな笑みを浮かべて俺の手を握る。

握手を交わした。

思い切り、相手の指が折れてもいいと思いつつ力を込める。

そうすると、向こうも力を込めてくる。

とりあえず要達には聞こえない小声で言ってる。

「仲良くしてやっても、いいが……くれぐれも俺の妹に欲情するなよ、変態」

「そつちこそ、要に妙な手出しをしたりしたら、命はないと思え」

ちなみに俺はコイツとは違ってシスコンではない。

ただ、まだ小学生の妹が変なロリコンに付きまとわれていかげわしいことをされないか心配してるだけだ。

妹は絶対嫁にやりたくないなどというシスコンまっしぐらでは…

…。

「ねえねえ、せっかくだし要さんも冬馬さんも一緒に遊ぼうよ！」

春麗がいきなりそんなことを言い出した。

何を言ってるんだ小学生。

「春麗、それは……」

「え？　だって、一緒に遊んだら仲良くなれるよ」

いや、仲良くなつてはダメなんだ。

仲を深めてしまうと、マフィアの目の敵にされる可能性が高くなってしまう。

今ならまだ大丈夫な領域かもしれないんだ。

これ以上踏み込むわけには。

「そうですね。わ、私も飛鳥君のことよく知りたいので」

要もこちらをチラチラ見ながらそわそわした様子で呟く。

ここは、どうなんだ？

断ったらまずいのか？

シスコンの冬馬がいるから、ここで断ったら命が危うくなるかもしれない。

「そ、そうだな」

俺が笑顔で対応すると要はぱあっと天使のような笑顔を浮かべた。

結局、四人で草原を散歩することになってしまった。
目の前に広がる新緑の草原は、太陽の光を浴びて煌めいている。
本当にゲームのなかなのか疑ってしまうほどのリアルな空と草原である。

空漠と広がる空を白い鳥が羽ばたき、大きな輪を描いている。
それを見上げながら歩いていると要が隣を歩いてきて、手を握ろうとしてくる。

さっとかわすと要は、不満そうに見上げてくる。

マフィアの娘でなければ、即座に食いついていたのに。
神社の息子だから、童貞を捨ててはいけないということはない。
それがダメならば、父さんも母さんと結婚して俺が生まれるということはなかったはずだ。

跡継ぎは必要だからな。

歩い足取りで前方を歩いているのは春麗だった。
スキップをしながら楽しそうに歩いていて、結った髪が揺れている。

「あ！」

春麗は急に足を止めてこちらを向く。

「どうした？」

「あそこで女の子が」

春麗の指差した方向へと視線を移すと、確かに女の子がいた。

女の子はその場にうずくまり、巨大な緑色の身体に真つ赤な目で背中にはきれいとは言えないハエつばい羽を生やしていた。

あれは確か《緑羽》だったか。

いや、今は魔物の名前を思い出している場合ではない。

その《緑羽》はうずくまる女の子に何度も体当たりして攻撃しているのだ。

女の子の持っていたらしい武器の棍棒はまっ二つに折れて地面に転がっていることから、抵抗する術がないんだろう。

早く助けた方がいいと思い、袖をまくり上げていると、冬馬が腰に携えていた刀身の黒い刀を引き抜き、一瞬で《緑羽》と女の子の間を駆け抜けた。

すると、《緑羽》はまっ二つに身体が切断され、緑の血のシャワーを降らせて光の粒子となり消え失せた。

その場に経験値となる数字が表示され、冬馬のステータスバーに吸い込まれていく。

女の子は立ち上がると、冬馬に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「この辺りの魔物は少し強いから初心者が安易に来てはいけないだろ」

「す、すみません。ちょっとレベルが上がって来たかなと思って調子に乗ってました」

ペコペコと頭を下げる女の子。

冬馬は偉そうな態度で腕を組んで。

「次からしつかり計画を立てなさい」
「は、はい」

しかし、えらく態度が違うんだな。
要と話す時は、お兄ちゃんは許さないぞとか言ってるというのに。
いわゆる二重人格ってやつなのか？

女の子は冬馬の説教を受けた後、慌てて走って行ってしまった。
何だか不憫に思えてきてしまった。
もう少し優しくできないのか？
助けて大丈夫か？　ぐらいは言った方がいいだろ。

「冬馬さんは強いんだね！」
「もちろんだ。俺は何をするにも手を抜かない」

春麗が拍手を送るのに対してそう答える冬馬。
軽くブン殴りたい。
そう考えていると、要がぎゅーっと腕をしがみついて来て頬を染めながら告げる。

「男の人が女の子を助けるのって素敵ですよね」
「……まあ、そうだな」
「だから私も……」
「俺は君のことを好きなわけじゃない」

要はむっとした様子で言う。

「私は、諦めません。あらゆる手段を使っても、振り向いてもらいますっ」

あらゆる手段だって……？

まさか、マフィアの娘だから脅す気なのか？

路上で突然誘拐されて、監禁されてなんてことが普通に起こりそうで怖い。

004、マフィア娘の部下はやたら鬱陶しい。

上を見上げると透き通った青と白のグラデーションが飛び込んで来る。

いつもとは違う道を歩いて散歩をしていた。

周囲には緑の葉をつけた木々が並んでいて、やわらかい風が吹いていて心地良い。

休日が一番安心できる日だ。

学校に行つて要と顔を合わせることもない。

一人でぶらぶらと散歩する方がよっぽど楽だ。

ふと、大きな木が目に入った。

樹齢何百年とか言われても普通に納得できてしまいそんな雰囲気の木で白い紐が巻かれていて、生い茂る葉は数え切れないほどぎしりでその場に影を作ってしまったている。

いわゆる御神木というやつだ。

神が宿る木とか非科学的なことが伝えられていたり。

特に信じてはいない。父さんは熱心に祈りに来ているが。

その木の根元にもたれかかって目を閉じている少女がいた。

長い亜麻色の髪は滝のようだった。白いブラウスに身を包んだ彼女は目を開けるとぼーっとした表情で「よっこらせ」と言いながら立ち上がり、こちらに来る。

「ん、要様の結婚相手じゃない」

「結婚はしてないからな」

「美人と結婚すればいいじゃない。私も友達に自慢できるし。従兄弟が美少女と結婚したのって感じ」

「自慢の材料にするな」

目の前にいるのは、従姉弟である葵だ。
基本的にやる気がなく、面倒くさがりなんだがたまに余計なことに首を突っ込んでくる。

「でもいいの？ 今逃したら、もっと可愛い子が現れるとは限らないし、そこそこの女と結婚してそこそこ幸せでいいのかね？」
「そうは言うけど、早死にはしたくないんだ。殺害されるなんて死に方は流石に嫌だからな」

銃で心臓撃たれて苦しみながら死ぬなんてごめんだ。
しかも、原因が美少女と結婚したことでの親に恨まれてという間抜けな理由も。

どうせなら、あれだ。

死ぬ時は、家族に見守られながら布団で静かに息を引き取る方が。

「まあ、私はべつに困らないからいいけど。あ、くれぐれも殺されそうになった時は私とアンタは他人ってことで」

「……すぐく仲の良い従姉妹だな」
「巻き込まないでね」

ちなみに巻き込むなと言われたら巻き込みたくなるのが普通なわけ。

「あ」

「？」

「こ、こんにちは」

背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
振り向くと巨大な弁当箱を抱えた要が立っていた。

赤いパーカーに黒い半ズボンという普通の格好でマフィアには見えない。

しかし、問題は要の後ろだ。

黒いスーツを着込んでサングラスをかけた柄の悪そうな男が五人ぐらい控えている。

こいつらは、要の部下なのか？

あらゆる手段ってこれか？

やばそうなマフィアの部下を引き連れてさりげなく脅してるのか？

後ろの男は、懷に黒い拳銃のようなものを用意していたり。

間違いなく銃刀法違反だが、通報しようとしたら殺られるな。

要に対して下手な応対をしたら死ぬかもしれない。

「んと……」

要は頬を赤く染めながらじつとこちらを見た。

しばらくオロオロした様子で「うー」だの唸りながらもじもじ。

あと、その後ろから部下が「頑張ってください」とか掛け声をかけているのも非常にうざったい。

まあ、銃を構えて今にも撃ち殺されそうになるよりは随分マシだけれども。

しかし、要は何でいちいち赤くなるのか理解できない。

クラスメイトが見守るなか、恥ずかしげもなくいきなり結婚してくださいと求婚なんかしたのに、何を今更照れる必要があるのか。

要はずいっと弁当を差し出して来た。

「ど、どうぞ」

まさかの手作り弁当というやつだろうか。

拒否はできないな。

後ろの部下達がいる限りは。

「何て優しいんだ要さん！」

何て鬱陶しいんだ、あの部下達は。

あいつらは要の親に、何でもかんでも要を褒め称えろと脅されているのか。

恐い風貌に似合わず随分と明るそうな連中だ。

ここで、弁当を受け取らなかったりしたらまずいし、弁当を受け取ったら何らかのデメリットがあるわけでもなさそうなので素直に受け取ることにした。

にっこりと笑顔を浮かべる。

「ありがとう」

「こちらこそ」

要は頬を緩める。

とりあえず、この弁当が不味くなかったらいいけど。

殺人料理とかは勘弁してほしい。

この際だから、コックに作ってもらった激ウマ料理を自分で作ったということにしているとかでも嬉しい。

味は大事だからな。愛情はその次だ。

しかし、でかい弁当だな。黒い重箱で八人分ぐらいはあるんじゃないか？

「でかい弁当ね。私にも分けて」

横から葵が覗き込んでくる。

要は葵に視線を移したと思うと表情が曇る。

「その人は……」

これは、まずいかもしれない。

ここで要が葵が俺の恋人だとか勘違いされたら命が危つくなりそうだ。

勘違いされる前に説明しておくべきだな。

「これは、従姉妹なんだ」

「従姉妹さんですか？」

要は目を丸くした。

「ん、私は葵ね」

「要です。飛鳥君と結婚しようと思います」

そう言いながらぺこりと頭を下げる。

ちよつと待て、その自己紹介は何なんだ。

おかしいだろ。婚約者ですとかそういう自己紹介なら見たことがあるが、結婚しようと思うとかは珍しい。

しかし部下達が目を光らせるなかで注意できるはずもなく。というかあの部下達は何だ。

激しく鬱陶しいから追い払ってほしいんだが。

要に頼んでみたら追い払ってもらえるのか？

葵はじつと要を見つめ、

「私の方が美人ね」

「!？」

いきなり何を言ってるんだ。

相変わらず眠そうな表情で爆弾発言だ。

一応要の部下がこの場にはいるわけで、命取りになりかねない。

「まあ、冗談ですけど」

「当たり前だ。君のいいところは胸が大きいところだけだから」

「重いんだけど」

「……………」

要はなぜか涙目だった。

しかし、理由はすぐに分かった。

ここで泣かれるのは困るので即座に対応した。

「まあ、俺は小さい方が」

「私、小さいです」

だとか言ってアピールしてくる。

ちよろい。

この程度でうまくいくとは。

いや、決して馬鹿にしてるわけではないんだ。

「てか私、そのマフィアが怖いから帰っていい？ ゲームもやりたいし…………」

「俺もゲームしたいから、そろそろ帰るか」

「じゃ、じゃあ、私も帰ってゲームします。レベル上げならお手伝いしますよ」

ゲームのなかでまで追いかけられるのも辛いな。

まあ、部下もゲームのなかにはまでは付いて来ないから現実で会うよりは楽だ。

「手伝ってくれのは嬉しいけど、集めたアイテムなんかは全部俺のものにするからな」

「了解です」

そこは了解じゃないだろう。

好きな相手のためなら、どんなに不利になってもいいのか。

「結婚はまだですか……」

「それは断る」

しかし、最近はゲームにログインするのも辛いな。

恋は苦しいというが、マフィアの娘に恋をされるのも確かに苦しい。

005、マフィア娘とゴロゴロ転がって遭難。

少なくとも、昔はゲームが大好きだった。

小学生の頃なんかは家に帰って来たら、服を着替えることもなくいきなりゲームを始めるぐらいに。

今までゲームは楽しい以外のなにものでもなかったはずだ。ゲームをやるのがこんな憂鬱なのは、最近になってからだ。素顔をバラしてしまうのは、危険だとよく言われていたが、ようやく理解できた。

金がないからと安いのに手を出してしまったのは落ち度だ。しかし、妹はすっかりハマってしまっていて、ゲーム内で何かあったらと考えるとやめることはできない。取り上げることもできないわけで。

いつも通り、ヤマト・オンラインにログインすると青いゲートにいた。

ゲートから出て和風の建物が建物が立ち並んでいて、武器屋や宿屋などにはNPCが控えている。

瓦の屋根は実にリアルで本物と変わらないほどでゲームのなかとは思えない。

周囲を見回しながら歩いていると、春麗が服の裾を引っ張っている。

俺は春麗に視線を落とした。

「どうした？」

「友達と約束してるから行って来ていい？」

「いいけど、早めに帰って来るように」

「分かってるよー」

返事をする春麗はくるりと背を向け、パタパタと走って行った。どうやら今の小学生は外で遊んだりするよりも、このゲームのなかで待ち合わせして一緒にモンスター討伐だのダンジョン攻略をするのが主流らしい。

まあ、普通のテレビゲームとは違って、しっかり身体も動かすし、目が悪くなる心配はないから健康上は問題ないんだが。

問題はないから誰も文句は言わないんだが。

やっぱり一人になると少し寂しい。

ゲームのなかとは言え、一人ポツンと置いていかれると何とも言えない。

建物の間には桜の木もある。

燦然と輝く桜の花弁がふわりと風に運ばれていく。

その風のせいかな、顔に花びらが飛んで来た。

顔についた花びらを払うと周囲を見回した。

真っ青な空が広がり、太陽が地上を照らしているので明るくものを見分けやすい。

大勢のプレイヤーが町のなかを歩いているので、特定の人物を探すのは骨が折れそうだ。

しかし、要との約束をすっぽかすわけにはいかない。

冬馬と一緒にプレイしていたとしたら、要が俺のことを待っているのに俺が行かないなんて状況になると激怒するのは間違いないだろう。

それこそ、妹を弄ぶなどか言ってくるに違いない。

しかし、いきなり求婚なんかしてくる要は普通だとは思えない。

いや、マフィアの娘だから普通なはずはないか。

「飛鳥君」

「……………」

振り向くと要の姿があった。
背中には木刀を携えていて、戦う気があるようだ。
俺は周囲をぐるりと見た後、彼女に視線を戻した。

「今日は兄はいないのか？」

「はい、いません」

こくりと頷いた。

いないのなら、好都合だ。

正直、いられたら鬱陶しくてたまらない。

兄妹二人に囲まれて過ごさなければいけないなんてのは拷問だな。

「い、行きましょう！」

俺たちが来たのは、東エリアだった。

東エリアは、初心者が挑戦するにはあまりおススメできないエリアで、大体レベル40以上が適正だと聞いている。

もうレベル40は超えているので問題はない。

東エリアには、吹雪が吹き荒れ、白銀の世界が広がっていた。
所々に見える灰色の岩山は、てっぺんが白く染まり、地面は白い
雪のクッションで埋め尽くされている。

吹き荒れる吹雪は銀に輝いていて、綺麗ではあったが視界が悪く
て不便だ。

HPを確認しようとステータスを開く。

アスカ LV 51 闘士

HP 679

MP 123

見たところ、HPも特に減っておらず回復の必要もなさそうだ。
ちなみに闘士というのは、特にレアでもなく一般的で物理攻撃に
も特化している上、回復魔法も少し扱うことができるバランスのと
れた職業である。

隣では要がぶるぶる震えていた。

ゲームのなかとは言え、五感はきくようで寒さも痛みもしっかり
感じる。

恐らくリアルなゲームをと思ってそうしたんだろうけど、とりあ
えず痛みはいらなないな。

テレビゲームなんかとは違ってターン制じゃないから素早く動き
回れは攻撃を受けることなく、倒すことも可能だがプレス攻撃など
は避けにくい。

真っ白な世界に目を凝らした。

どこから敵が出て来てもいいように構える。

要も木刀を構えてぶるぶる震えていた。

「……大丈夫なのか？」

いくら何でも震えすぎだろ。
そんなので戦えるのか？

「だ、ダイジョウブです……」

カチコチになりながら頷く要。

まあ、ゲーム内で喰らったダメージのせいで現実世界で風邪を引いたりなんてことはないんだけど。

仮に死んだとしてもHP1でゲートの前に飛ばされてアイテムがいくつか消える程度だ。

いつ敵が出てきてもおかしくないので視線を要から外し、周囲に目を凝らす。

激しい吹雪のなかから、白い身体で紫の模様があり、ふわふわしてそんな魔物《雪狼》が現れた。

《雪狼》は鋭い眼光でこちらを見据え、目が合った瞬間牙を剥き出しにして突進してくる。

素早く避け、《雪狼》が止まると背後から拳を振り下ろす。

赤い炎のような光が発生し、背中に強烈な炎を一撃を加えた。

《火打》

素手スキルの一つで自分の拳に炎を纏わせ、文字通り炎属性のダメージを与える。

《雪狼》は氷属性で炎には弱く、背中には大きな焼け跡をつくり、わずかによろめくところらに向き直った。

しかし、すぐに向きを変え、激しい吹雪のなかに身を隠す。

どこから攻撃がくるのか分からない。

俺は緊張しながら周囲を警戒した。

見えるのは、岩山と底の見えない崖。

不意に背後から《雪狼》の唸り声が聞こえ、すぐさま《火打》のスキルを発動すると、後ろへ向き直り、正面から突っ込んで来る《雪狼》にもう一度拳を振り下ろす。

《クリティカル》

たまたまクリティカルヒットしたらしく、攻撃を受けた《雪狼》紅蓮の炎に包まれながら、粒子となりその姿を消し去った。

息を整え、要の方に向き直るともう一体《雪狼》が彼女の背後にいた。

要は気づいてないらしくこちらを見ている。

《雪狼》はチャンスと思ったのか、すぐさま飛びかかる。

まずいと思い、要を抱えたのだが間に合わず《雪狼》の体当たりを受けてそのまま二人で雪のなかを転がる。

そして、ある場所を過ぎるとその先に地面がなかった。

崖から底へと落ちていった。

崖から落ちたダメージは強いらしく、俺も要もHPが半減していた。

落ちた先には洞窟があり、とりあえずそこで休むことにしたのだが。

薄暗い洞窟の地面はごつごつしていて、座るには少しどうかと思えた。冷たい空気が漂っていて、大した寒さ凌ぎにはなりそうにな

い。

要はぺこぺこと頭を下げてきた。

「ごめんなさい。私のせいで……」

「いや、何も君のせいでは——」

「いいえ、私のせいなんです」

要は暗い表情で呟く。

なぜ、自分のせいだと言い張るのか疑問だった。

要は《雪狼》に気づいていなかったんだから、仕方のないことだ
と思うが。

「気づいてなかったんだから、何も」

「違うんです。私は……女の子らしく見られようとしてて、そのせいで……」

「何のことが知らないけど、気にするな」

そう言って要を制止した。

どういつことなのか、気にはなったが、聞かない方がいいだろう。
彼女は、じっと俺の腕を見ていた。

「怪我……」

言われて自分の腕を見てみる。

怪我と言っても擦り傷程度で大して痛くもない。

「手当て、しますから……」

「君は大袈裟だ。どうせ現実世界に戻れば何もなかったことになる
から——」

「ダメですつ。小さな怪我でもここでは、HPが減少していきます

から、血を止めておかないと」

要はぶくつと頬を膨らませて自分の服の袖を破いた。
その布を持って、片手を出して。

「腕、出してください」

「……………」

俺が腕を出すと要は布でぐるぐる巻きにした。
擦り傷程度で巻くとは。

絆創膏がないから仕方ないか。

ここでは、怪我をしたらHPが減少していくという現象が発生する。

しかし、包帯などで血を止めてしまえば減少しなくなるという変わったシステムだ。

もちろん、回復魔法を使うのが一番でつとりばやいがメンバーに回復魔法の使い手がない場合はこの方法しかない。

「ありがとう」

一応礼を言っておく。

要は、実際可愛くて性格もいいからなんとなく好意はある。

要は俺の一体どこが好きなんだろうか？

「要は俺のどこが好きなんだ？」

そう問いかけると要は正座したまま頬を綻ばせた。

「飛鳥君のいる神社はとても暖かいですから」

「？」

俺は思わず首を傾げた。

要は神社に来たことがあるのか？

とりあえず、俺の記憶ではマフィアの部下達を引き連れた女の子がお参りに来たことはないはずだ。

「一体どういう――」

問いただそうとすると、唸り声が聞こえた。
すぐに入口へと視線を移す。

またしても《雪狼》だ。

これは、相当しつこいな。

立ち上がって、スキルを発動しようとした瞬間、紫色の閃光が《雪狼》の身体を貫き、一瞬にして消し去ってしまった。

「よ、無事ですかな？」

姿を現したのは葵だった。

巫女装束を身に纏い、金と青の装飾が施された豪華なクロスボウをその手に持っていた。

洞窟内に入ってきて来ると座り込み、得意気な表情で言い放つ。

「なになに？　もしかして、お邪魔だったの？　でも、私強いから役に立ったでしょ」

「君はゲーム関係でしか役に立たんけどな」

「しかしゲームでは神レベルだしね」

葵は何を自慢したいのか、自分のステータス画面を開く。

アイ LV 987 聖闘師

HP	17900
MP	2309

お前は改造でもしたのかと言いたくなるほどの有り得ない数値だ。
しかし、これが改造ではない。

もはや廃人と言えいいのか。
桁が違うだろ、桁が。

これだけなら、あの《雪狼》をたった一撃で倒せたとしても問題
はないだろうが。

葵は壁にもたれかかりながら、やれやれと言った様子で発言する。

「洞窟に二人きりなら、何かあってもいいじゃない？　せめて、押し倒すか押し倒されるかぐらいしなさいな」

いや、そこはその二択じゃないだろう。

俺はいきなり許可もなく、女の子を押し倒したりしないし、要も
まさか男を押し倒したりはしないだろう。

どう見ても肉食系女子ではない。

「さて、そろそろ帰るか」

「こら、無視しなさんな」

「私もそろそろ帰らないと……」

要は立ち上がると、ぱんぱんと手で服についた汚れを払った。

それにしても、どこが好きなのか聞きそびれてしまった。

まあ、今すぐに聞かなければいけないわけでもないからいいか。
そう思いつつ、吹雪が吹き荒れる白銀の世界に身を投じた。

006、ツンデレもどきの苗字は桜坂ではなく、桜下だと信じてる。

吹雪のなかを歩き続け、ようやく東エリアを出ると町が点在する中央エリアに戻って来た。

東エリアから出ると、吹雪は一切なくなり緑濃い草原が一面に広がっていた。

空はすっきりと晴れていて、太陽の温かい陽光が降り注いでいた。微風が草原に波を作る。

町に入ると春麗を探すことにした。

大勢のプレイヤーで溢れかえっており、流石に探しにくい。

町のなかを歩いていると、要がくいくいと袖を引っ張ってきた。彼女に視線を移すと、

「葵さんはどこ行っただんですか？」

そう言われて周辺を見回してみたが、葵の姿は見当たらない。

確か途中までは一緒にいたはずなんだが。

まあ、急にいなくなったところで問題はない。

「どうせどこか攻略しにでも行っただろう。あれだけのレベルがあれば心配もないだろ」

学校行く以外はほとんど家から出ずにゲーム三昧だからな。

今更実力不足で魔物に敗北なんてへまはやらかさないだろう。

急に出て来て急にいなくなるのもいつもことだ。

あれが自分の従姉妹だと思つと正直、何とも言えない気持ちになる。

とりあえず、春麗はフレンドコードを登録しているので、居場所

を特定することができる。

ステータス画面にあるフレンドコードから春麗のものを選択した。すると、目の前に地図のようなものが浮かび上がり、赤い光が居場所を示している。

その場所に向かって進んで行くことになる。

ここでは、やにくもに探し回るよりもこの方法を使った方がはるかに便利だ。

最も、フレンドコードを登録していない相手を探す場合は探し回るしかないんだが。

人ごみを掻き分けて進んでいくと広場に出た。

石像などが中央に飾られていて、平たい石で地面が埋め尽くされている。

石像の前で春麗が立っていて、すぐにこちらに気づいて両手を振ってくる。

「おーいっ！ こっちだよー！」

春麗はにこにこ笑顔を浮かべていた。

そして要に顔を向けると不思議そうに首を傾げた。

「あれ？ 要さんも一緒？」

「一緒です。こんにちは」

要は礼儀正しく頭を下げる。

流石に小学生に頭を下げる必要はないんじゃないか。

「こんにちはーっ！」

春麗も満面の笑顔を浮かべて挨拶する。
それにしても、春麗はいつもやたら明るいな。俺とは違って。
友達も多いようだし、元気なのはいいことだ。
むしろ暗い顔してたり、ぼーっとしてたら何があったのか心配になるほどだ。

「わ、私がお嫁さんになったら春麗ちゃんが妹に……」
「そうだねー。美人なお姉ちゃんができるなら嬉しいなあ」
「待て」

俺は結婚すると言った覚えはない。
何だか疲れてきた。

「そろそろ夕飯の時間だろうからログアウトした方が」
「そうだね！ 僕、お腹空いちゃった」

言いながら春麗は腹を抑えて苦笑いをした。
確かに腹がぐるぐる鳴る音が聞こえてくる。

「私も夕飯なので……あ」
「？」

要はぎゅっと裾を掴んできて、真剣な表情で口を開く。

「今度神社に遊びに行ってもいいですか？」
「それはちよつと……」
「そ、そんなに嫌なんですか……」
「いや、そういうわけではなく」

まさか遊びに来る程度でぞろぞろと部下を引き連れて来られても

困る。

どう対応したらいいのか分からない上、楽に話もできないだろ。
あとお茶とお菓子を一体何人分用意しろと言っんだ。

夕飯を終えると神社の周囲を巡回していた。

暗くなった神社は、はたから見れば少し近づきづらい雰囲気をつている。

空は暗闇に包み込まれて様々な色の星が煌き、月の淡い光が地上をうつすらと照らしている。

しばらく神社の周りでぶらぶらしていたのだが、ふと人の声が聞こえた。

声の方へと進んで行くと、大きな木の前で一人の少女と男がいた。二人はどうやら口論しているようで、穏やかな空気ではない。

少女は黒髪でポニーテール、黒いジャンパーを着込んでいて赤いスカートを履いていた。

それに対して男の方は柄が悪そうだった。

もしかしたら、ただの喧嘩ではなく、痴漢とかそういう類のものかもしれない。

流石に放っておくわけにもいかず、すぐに間に割って入った。

「何の騒ぎだ？」

「え？」

少女は目を見開いてこちらを見た。

「何だお前？ 子供は帰って寝てろ。邪魔を——」

男が鬼のような形相で掴みかかってこよとした瞬間だった。

俺ではなく、少女がその男の腹に思い切り蹴りを入れ、男はごろごろと地面に転がった。

それから少女がしばらく男に暴行を加えていた。

これは、通報した方がいいのか？

最終的に男は慌てて逃げて行ってしまい、少女はこちらに向き直った。

ポニーテールが揺れる。

「べ、べつに私一人で大丈夫だったんだから……」

確かに大丈夫だったな。

もはや何のために割って入ったのか分からなくなってしまった。

「でも……」

「でも？」

「アンタ名前何て言うの？」

「……飛鳥」

でもから名前か。

普通そこは、でも、嬉しかったとかそういうセリフがこないか？

「わ、私は莉子って言うのよ」

「ふむ？」

で、この後どうなるんだ？

何と言つか、俺があのお男を追い払ったわけではないから助けたことにはならないだろうし、お礼をしてくれるとかはないだろう。

莉子は両手をにぎにぎしながら呟く。

「私は強いから、絡まれてても誰もこっちを見向きもしないのよ。だから――」

「待て」

強い女はごめんだ。

マフィアの娘だけでも、あれだけの脅威だと言っのに自ら戦える女なんていうのは。

相手が可愛い女の子だろうが、殴られたり蹴られたりして愛情表現されるのが許せるタイプじゃないからな、俺は。

「べ、べつに、間に入ってもらえたからこの人優しいズキーンってなっただけなんだから！」

ズキーンってなったって言ってるが？

随分素直な言い分だ。

さてはツンデレもどきのデレデレか？

「私、巫女さんになりたいと思ってるのよ。それで、その神社とか」

「嘘をつくな」

どう見ても巫女になりたいようには見えない。

莉子はわたわたとした様子で言う。

「お、覚えてる。会ったのは今日が初めてじゃないのよ」
「はて？」

「幼稚園の時、結婚の約束したじゃない」
「いや、知らないけど……」

幼稚園の頃の記憶なんてほとんどないに等しいからはつきり否定することはできないが。

この記憶の曖昧さを利用してのでっち上げの可能性もある。

「私の初恋の相手はあなたのお父さんなのよ」

「じゃあ、父さんに告白して来い」

「振られちゃったんだから！」

それは振られるだろう。

父さんは既婚者で子供もいる上に、年齢は莉子と親子ほどの差がある。

そういえば、小学生の頃に父さんに毎日会いに来る女の子がいた気がする。コイツだったのか。

しかし、同じ学校の生徒の親に恋をするとは、どいう育ち方をしたんだ。

「とりあえず、幼稚園の話は知らないな。で、何で俺にズキーンなんだ？」

「私が振られて落ち込んだ時に慰めてくれたじゃない」

「それでこの人優しいズキーンか？」

「そうかもしれないわねっ。べ、べつに好きってわけじゃ」

ダメだ、要がいる状況で他の女とフラグ立てたりしたら、要の親が激怒して殺されるかもしれない。

というか、今度から困ってる女の子がいても無視した方がいいの

か？

「もう大丈夫だな、俺は帰る」

「べ、べつに送ってほしいなんて思っ
てないんだから」

「なら送らなくていいな」

「そう言っ
て、最後に一つだけ尋ねた。」

「君の苗字はなんだった？」

「苗字？ 桜坂
だけど」

「気のせい
だろうな。」

「桜下でいい
な？」

「何で苗字
変えられるのよ！？」

まあ、単に苗字が同じだけかもしれない。
思えば桜坂なんて苗字は結構見かけるから。
まさか、従姉妹や兄妹ではないはずだ。
俺は踵を返すと早足で夜道を歩いた。

007、ツンデレもどきは口論では弱い。

ヤマト・オンラインにログインして草原で仰向けになりながらブルーの雲一つない空を眺めていた。

草は柔らかに気持ちが良い。

目の前に広がっている空、太陽、優しく頬を撫でる風。

全てがゲームのなかとは思えないほどの出来だ。

戦うのもいいが、こうしてのんびりするの也不错くない。

砂漠や雪原、海など様々な場所があるし、普段出かけたりできない人には良さそうだ。

さくさくと草を踏む足音が聞こえてくる。

だんだん音が近くなってきた。ふと静かになった。

その場に影ができ、その場に人がいることが分かる。

その人物は俺の顔を覗き込んだ。

細く糸のような髪が視界に入る。

俺は彼女の顔を確認すると、呟いた。

「要か」

「要です」

要は頬を綻ばせた。

そう天使みたいな笑顔を浮かべられても困る。

そもそも、俺は恋愛をしたことがない。ドラマや本とかを読んで何となくは分かるが、実際に体験したことがないから明確にどんな状況が恋に落ちているのか分からない。

胸がドキドキするとか言うが、少なくとも今の俺はドキドキしていない。

要はどうなんだろうか？

疑問に思ったが、まさかドキドキしてるか？ と聞けるはずもな

く目を閉じた。

視界が真っ暗になると頬をぺちぺち叩かれてすぐに目を覚ました。
俺はじとつと要を睨み、問いかける。

「何をする？」

「相手してください」

俺は起き上がるとため息をつき、呟いた。

「そろそろログアウトしようと思うんだ」

「ま、待ってください……」

要はぎゅーっとしがみついてくる。

要の表情を確認すると、目に端に涙らしきものを溜めて訴えかけるような目でこちらを見ていた。

普通なら、これで可愛いと思って襲いかかるんだろうか？

しかし、涙目になればいいと思ったたら大間違いだ。

相手が恋人ならこれで抱きしめたりなんて展開になるかもしれないが。

「お、お相手してください」

「何の？」

「私の……」

「ふむ……」

どう相手をしろと言っただ。

草原に座ったまま無言で見つめ合う。

風の音だけが耳に入ってきて、草原の草と髪の毛が揺れるのが目に映る。

「……………」

会話もなく見つめ合うとか何がしたいんだ。

相手ってこれか？

見つめ合うだけでいいのか？

しかし、美少女をじつと見つめるというのも何だか……照れはしないが。照れはしないんだが。

流石に延々と見つめ合うのは耐えられなくて顔を背けた。

「飛鳥君、そ、背けないでください。ショック受けちゃうんです」
「そう言われてもな——」

言いかけた時、要が両手で俺の顔を挟んで自分の方に向ける。

俺は驚いて目を丸くした。

何のつもりだコイツは。

「そ、その」

要は頬を紅潮させ、じつとこちらを見据えてくる。

何がしたんだ、コイツは。

綺麗な空の下、緑濃い草原で見つめ合った男女は——とか何か伝説でもあるのか？

その何とも言えない空気を誰かの声が破った。

「何してんのよ！ 昼間から恥ずかしくないの！？ キスしようとか何考えてんの？ まさか、キスだけじゃなくてそれ以上踏み込むつもりだったの！？」

そんなことを言っただけなのは昨日出くわした莉子だった。

莉子は鬼のような形相でこちらを睨みつけている。

はつとしたようで、一度大きく息を吐いて腕を組んで仁王立ちになった。

「全く、お姉もまだまだ子供なんだから」

この言い分は、昨日の予感が的中したと考えて良さそうだが、他人、友達でもお姉と呼んだりはしないだろう。認めたくはないが、苗字も桜坂だと言っていたし、莉子は要も妹という感じだろうか。

もしくは双子とか。

ぱつと見、あまり似てないんだが。

「べ、べつに私はその人のことが好きなわけじゃないんだけど」

「そうなんですか。じゃあ、関係ないですね」

要はにっこりと微笑んだ。

それに対して莉子はうつと口を噤んだ。

ツンデレの言い分が通じないタイプらしいな、要は。

もしかしたら、分かっているながら通じてないような応対をしている可能性もあり得るが。

莉子は頬を引きつらせながら口を開いた。

「で、でもね、世の中にはポニーテール萌えの男が多いのよ」

「大和撫子みたいなのが好きな方も多いですよ？」

要が天使のような笑顔で言う。

まさか、自分のことを大和撫子みたいだと思ってる痛い子なのか。

いや、マフィアの娘という変なプロフィールを持っていながら、今更痛い子だったとしても驚くことはない。

「男はね、強い女が好きなのよ。私はレベルが50もあるんだからね！」

「私は80ありますよ」

「……………」

ゲームのレベルで張り合っとううするとううんたろう。

そんなもの、現実世界に戻っしまえば何の意味もなさないというのに。

「要は80もあつたのか。俺より上じゃないか」

「何か知らない間に上がってました」

レベルアップしたら、音が鳴るから分かるだろう。

しかし、レベル80ということは俺よりも強いのか……？

莉子は憤慨した様子で大声でわめきたてる。

「レベルなんて関係ないんだからっ！　そうだ、洞窟のドラゴンを倒しに行つて来る！　私の方が強いって証明してやるんだから！」

そんなことを行つてくると背を向けると駆けて行つてしまった。その場に立ち尽くしたまま考えた。

ドラゴンというのは、中ボスだ。ボスは一人で倒すには苦しい相手には間違いない。

一人で倒すつもりならレベル100以上は必要だと言われているのだが、莉子のレベルは50。ほぼ確実に戦闘不能になるだろう。

まあ、死んだところでゲートにHP1で飛ばされるだけだから心配する必要はないのだが。

放つておいてもいいのだろうか？

要が不思議そうに覗き込んで来る。

「飛鳥君？」

「一応ついて行くか」

「え？ 行かなくてもいいんじゃないんですか？ ゲートに戻されるだけなんですし」

「じゃあ待つてるといい」

この一言で、要は意外にも冷たいことが分かった。

まあ、兄妹に対しての態度は、普通はこんなものなのかもしれない。他人と接するのは丁寧でも、兄妹に対しては特に気は遣わないなんてのはよくあることだ。

俺は踵を返し、背を向ける前に付け加える。

「人助けはしないよりした方がいいな」

「わ、私も行きます！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088ba/>

VRMMOのおかげで美少女なマフィアの娘に求婚される。

2012年1月10日09時46分発行